

## 資料と公共性 : 2021年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

池上, 大祐

琉球大学国際地域創造学部 : 准教授

今井, 宏昌

九州大学大学院人文科学研究院 : 専任講師

多川, 孝央

九州大学情報基盤研究開発センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4772780>

---

出版情報 : 2020-03-07. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

## 遠隔による歴史教育の現状と課題—琉球大学における授業実践—

池上 大祐

### はじめに

筆者の所属する琉球大学では、2020年度以降のコロナ感染の拡大と停滞を繰り返すなかで大学構内の活動制限レベルが最大で4（学生は入構禁止）に達したことも、レベル1（教室の収容人数の70%以上であれば遠隔授業が必須）まで下げられたこともありつつ、恒常的にはレベル2（教室収容人数の50%以上であれば遠隔授業が必須）が維持されてきた。

この間、大学教員は、どの学問分野だろうと遠隔授業のスキルを身につけざるを得ず、さまざまな教育実践や工夫のためのノウハウが、大学内のFDやSNSによる研究者コミュニティのなかで共有されてきた。その一例が大嶋えり子・小泉勇人・茂木健介編『遠隔でつくる人文社会学知—2020年前期の授業実践報告』（雷音学術出版、2020年10月）である。123名からなる執筆者それぞれがZOOMやマイクロソフトTEAMSなどを駆使したオンライン型（リアルタイム）講義、各大学が活用する学習管理システム（LMS）によるオンデマンド型（音声データや資料配布型）講義などの実践例を寄せている。筆者も2020年度前期に担当したオンデマンド型講義の実践例を執筆したが、ここで共有されていたことは、「遠隔」という教育方法の可能性を問うというよりは、いかにコロナの危機を乗り越えるのか、という問題意識のほうが強かったように思われる。

2021年4月17日に開催された九州西洋史学会春季大会シンポジウム「遠隔から考え直す歴史教育実践」にて筆者が、2020年度を通じたオンデマンド講義の実践例について報告する機会を得たときには、いくぶんコロナ危機に「慣れた」こともあって、より冷静に遠隔教育の可能性を考察する雰囲気が醸成され始めていた。その後筆者は2021年度にはオンデマンド講義だけではなく、ZOOMによるオンライン講義（対面とオンラインのハイブリット講義も含む）も実施し、様々な可能性を模索してきた。本稿では、先述の電子書籍への寄稿原稿およびシンポジウムでの報告内容を土台にしながら、さまざまな遠隔授業の実践を紹介していく。なお筆者は、教育形態の在り方が学習者の認知機能にどのような効果をもたらすのかといった認知科学の専門家ではないので、遠隔教育の効果を、たとえば「教室」での対面教育と比較する方法論や知見は持ち合わせていない。あくまで自身の専門分野である歴史学の教育現場での経験を共有することを目的としたい。

## I. オンデマンド型講義—2020年度前期の概論系授業

筆者の所属する琉球大学国際地域創造学部には「学部共通科目」が設置され、観光学、経営学、経済学、歴史学、地理学、文学などの基礎知識を幅広く学べる仕組みとなっている。筆者が担当した「歴史総合」もその科目のひとつであり、100名程度が受講する大規模授業となっている。そのなかで歴史学を専攻する意思のある学生はごく一部であることから、全体を俯瞰する「わかりやすさ」が比較的求められる概論系に近い科目である。また、コロナ以前から積極的にアクティブラーニング型講義の導入も試みており、全15回の講義のなかで6~7回のグループディスカッションの時間も設けながら双方向の講義を目指してきた。そのさなかに、先述の通りコロナ危機によって、遠隔授業に移行することとなった。

まず、どのようなオンデマンド講義資料を作成したのかについて説明する。「聞く」「読む」「書く(メモする)」「整理する」「考える」の5つの動作が担保できるように意識して、主に、①音声付きPPTスライド、②講義レジュメ(目次、図解、年表、地図で構成)、③講義感想文記入欄、④事後学習用課題の4つのコンテンツを用意した。④の事後学習用課題とは、講義に関する資料読み取りや概念の説明などの課題のことであり、学生からの回答や意見を集約し、その後の授業で紹介するかたちで、コロナ以前のグループディスカッションで担保されていた「討論」の代替措置として導入したものである。

次に、どのように講義資料を配信したのかを紹介する。2020年度前期は学内活動制限レベルが4で学生の学内立ち入りが禁止されているなかでの対応を迫られていたことから、LMSを活用して、オンデマンド配信するという方法を前提として、配信するにあたって学生が置かれている(と思われる)環境をできる限り想定した。①手持ちがスマートフォンのみ、②PCはあってもOfficeソフトがない、③自宅にプリンターがない、④自宅にネット環境が未整備の4つである。これら4つは、元来大学のPCルームを活用すればすべて解決できたことだったが、特に入校制限が厳しい時期には、いずれにも対応できるよう配慮する必要があった。そこで、①と②については、音声動画をストリーミングで閲覧可能にした。③についてはコンビニエンスストア等にて自費で出力サービスを利用する可能性も考慮し、講義資料4~5枚に抑えた。④については、音声動画をダウンロードすればオフラインで閲覧可能であるとの説明を加えた。

最後にこのオンデマンド型講義に対する学生の様子や反応について紹介する。事後学習用課題の導入について学生から比較的多くの高評価をいただいた。その理由の大半は、講義内容を先取りしたり、復習したりする機会を得たことで講義内容の理解そのものが深まったというものであった。その点は事後学習用課題を設定する際にも意識したことであり、その内容も、参考文献の示し方や論説の要約といった基礎的なことから、年表や史料の読み取りなどの発展的なことまで多岐にわたった。講義の音声収録時に、事後学習用課題でこういう意見の学生がいたということをきちんと紹介することで、グループディスカッシ

ョンで得ようと想定していた「知を共有する」営みの一端をなんとか担保できたのではないか、という感触を得た。

## II. ZOOM によるオンライン型講義—2021 年度の史料講読系・特殊講義系授業

2021 年度前期に担当した「地域文化科学フィールドワーク」と「世界史研究」は筆者の所属する国際地域創造学部地域文化科学プログラムの専門科目であり、卒業論文を執筆するために必要な史料・文献読解のスキルや専門的な知識や概念理解を習得する少人数制の演習授業である。2021 年 4~5 月までは対面講義で実施できたが、6 月からのコロナ感染再拡大にともない、遠隔授業への移行を再び余儀なくされた。歴史学でいうところの史料講読系の「地域文化科学フィールドワーク」と特殊講義系の「世界史研究」は、ZOOM によるオンライン講義に切り替えた。前者は口頭による英文資料の翻訳と用語説明、後者はテキスト各章のレジюме報告とそれに対する討論を行うもので、オンデマンド型にはなじまないと判断したからである。2020 年度前期とは異なり、大学内の入構自体には制限がなかったことから、たとえ学生の自宅のインターネット環境が整備されていなくても、大学の空き教室を利用して Wi-Fi に接続する環境が確保されたことも ZOOM 導入の判断材料となった。

結果的には、対面式とほぼ同じ環境・ペースで授業を実施することができた。ただ、実施して感じたことは、中心にいる教員がそれぞれの学生とやりとりを行う、いわゆる「ハブ&スポーク」の構図となっており、学生同士が知を共有しあう討論の場が提供できていたとは言いがたい。微細な技術的な理由としては、ZOOM 講義によるビデオ画面のオン／オフをプライバシー保護の観点から学生の任意にゆだねたことから、「顔の見えない」討論になったことが挙げられよう。しかしそれは ZOOM によるオンライン講義が抱える課題というよりは、そもそも対面での講義でも同じように抱えていた課題ではないかとの気づきを得た。もちろん「教室」という空間では、発言者と直接向き合うことによる討論の雰囲気を感じることもあるだろうが、対面講義でも、発言を促すために教員が「解説しすぎる」（＝学生の発言の機会を奪う）ことが多々あったので、その意味では、ZOOM 授業の経験がむしろ、対面授業の課題を浮き彫りにしたといえる。

## III. ハイブリット授業の試み—2021 年後期の共通教育科目・概論系科目

2021 年後期では、学期開始時にはまだコロナ拡大の余波があったものの、次第に落ち着いていったことから、教室密集率 50%以下を維持できた共通教育科目（夜間）の「西洋の歴史と文化」は 10 月末の第 3 回目講義から対面講義に戻した。ただ、大学の方針で遠隔を希望する学生にも配慮する必要があったため、対面とオンデマンド型のハイブリットで授業提供することとした。「教室」での学びを喪失してきた学生は、対面の環境を切望して

いるだろうと思っていたが、登録人数約 30 名中 3~4 名のみが対面に参加するという状況であり、大半はオンデマンド型を選択した。しかもその対面に来る学生も、次第に 1 名のみになり、100 名収容できる教室での 1 対 1 の講義は、教室への移動とそこでのセッティングなどの労力・手間と釣り合わないと考え、当該学生の承諾を得て、筆者の研究室で対面+ZOOM によるオンライン+オンデマンド化の 3 つの形態を同時に満たすことにした。

【写真 1】は、筆者の研究室内の教員側 PC 画面を撮影したものである。ZOOM の入室やチャット欄をチェックしながら、パワーポイントスライドの画面共有で講義を行うことになる。【写真 2】は、同じく筆者の研究室内の学生が対面参加する席側のモニター画面を撮影したものである（PC はデュアルモニターとして設定して使用している）。この対面+ZOOM 講義を録画し、その動画を I で紹介した作成手順でレジュメ資料にリンクで埋め込むという方法で、オンデマンド用資料を作成した。

【写真 1】



【写真 2】



授業登録人数 33 名のうち、対面講義参加者 1 名、ZOOM 参加者が毎回 5~6 名程度となっており、結果として大半がオンデマンド型を選択した。「教室」という空間だけではなく、「リアルタイム」という時間すらも必要とされていないと思われる状況を、今後どのように理解していくべきであろうか。夜間講義だったことがどこまで影響しているのかも、今後の分析がおそらく必要であろう（夜間コースの存在意義にもかかわってくると思われる）。

2021 年度後期の「歴史総合」は、登録人数が 100 名を超えたことから、教室密集率 50% 以下の基準を満たせず、対面講義の実施は叶わなかった。I で紹介したような方法でのオンデマンド型講義で 5 回分ほど実施してきたが、開講時限の月曜日 2 時間目の時間帯に、かならず講義資料を閲覧・視聴し、感想文や課題を提出する層が 30 名ほどいたことから、

試しに ZOOM によるオンライン型を導入すると 30 名前後の学生が出席し、さらにオンライン講義の継続を希望する声があったことから、もともとのオンデマンド型に加えオンライン型を併用することとなった。オンライン講義の利点を生かして、講義中に問いかけや 5~6 分程度考えてもらう「ミニ課題」を出して、その場での学生の意見を引き出そうと試みた。マイクをオンにして積極的に発言する学生は少ないものの、チャット欄には積極的に書き込んでもらった。チャット欄に集まった意見を筆者が拾い上げ、フィードバックすることで、議論の共有を図った。オンマンドでの受講者にもその「ライブ感」を体感してもらうために、討論や議論の様子音声そのままオンデマンド用資料に収録した。なお、受講する講義の形態の違いが、学生の成績や理解度にどう影響するのか、という点については、1 月 29 日段階でまだ成績表が終わっていない状況なので、まだ不明であるが、講義感想文を確認した範囲では大きな違いは見つけれない。

## おわりに

以上、雑駁ながら、筆者が担当する琉球大学での歴史学に関する授業実践を紹介した。コロナ危機から否応なくはじまった遠隔教育という手段について、一定の手ごたえを感じている。100 名前後の大規模講義ではオンデマンド型を基本としつつ、オンラインの導入も可能であることがわかった。討論や発言を前提とする少人数の演習専門科目では、オンデマンドには不オンラインでもほぼ対面と同じ水準の授業の展開が可能であることが分かった。しかし、あくまで教員と個々の学生が「ハブ&スポーク」でつながることに留まったという課題が残った。今後は、対面授業では当たり前のように担保されていた学生同士の横のつながりの構築も意識した遠隔授業のしくみを構築していく必要がある。

ただ、遠隔授業を展開するにあたっては、細かな技術的作業、イレギュラーへの対応などのさまざま労力が対面授業よりも必要になることは事実である。対面とのハイブリット式を採用する際はさらに大変になる。もし今後コロナなどのような危機の存在を前提としないなかで遠隔教育の導入を進めることになれば、充実したティーチングアシスタント制度、学内のインターネット環境、学生の PC などの情報端末の入手の整備が急務である。

最後に、ポスト・コロナの遠隔教育を考える際には、これまで以上に、大学に配置されている科目群がどういう資質や能力を身に着けることを目的としているか、という「コンピテンシー」を意識する必要がある。教員の研究成果や論証のプロセスを開陳する授業ももちろん存在する意義や重要性はあるが、それが学生の 4 年間履修することになるカリキュラム体系のなかで、どのような位置にあるのか、という個々の科目特性をより一層意識する必要がある。将来的には、その延長線上に、遠隔教育をどう位置づけるのかという議論が必要になってくるであろう。